

ペットの問題行動の対処に見る家族とペットの関わり合い

－飼い主である主婦の体験に焦点を当てて－

【研究目的】

本研究では、ペットの問題行動の発覚から改善までの過程において、ペットの飼い主は、問題行動を起こすペットにどのように向き合おうとしたのかを明らかにしていった。さらに、飼い主は家族にどのようなサポートを求め、家族はどのようにペットに関わっていたのかも明らかにした。具体的には、ペットの問題行動の発覚から改善までの中で、①飼い主にはどのような精神的・身体的苦勞があったのか、②飼い主はペットに対してどのように向き合おうとしたのか、③飼い主は家族にどのようなサポートを求めたのか、④飼い主は何故問題行動を起こすペットに向き合い続けられたのかを明らかにしていった。

【研究対象者・研究手法】

家庭の問題となり得るペットの問題行動は、特に家庭を管理する主婦に影響を及ぼすと考えたため、主婦を対象とした。尚、現在も問題行動を起こしたペットと暮らしていることとした。対象者の年齢とペットの飼育歴は問わず、夫と子供と同居していることとした。ペットは犬と猫に限定し、犬の問題行動は①人や他の犬に対する攻撃行動、②分離不安、③不適切な排泄、④破壊行動、⑤過剰咆哮、猫は①不適切な排泄、②尿スプレー、③人や他の猫に対する攻撃行動、④異嗜、⑤不適切な爪とぎ行動に限定した。対象者に対して半構造化インタビューを行い、語られた内容を逐語録に起こし、ナラティブ分析を行った。

【分析結果・考察】

研究対象者はペットの問題行動により様々な身体的苦勞と精神的苦勞を感じながらも、ペットに寄り添いながら改善策を模索していた。身体的苦勞は問題行動を改善させようと試みる時に多く見られた。更に精神的苦勞は問題行動が起きている最中にも見られ、特に①直接的な被害に対してや、②責任を問われることを想定したり、実際に問われた際に多く見られた。

ペットの問題行動による被害やストレスがあっても、飼い主はペットの世話を放棄しなかった。飼い主が①ペットの問題行動は仕方がないものだとして認識していたり、②ペットは人の世話無しでは生きられないため、世話の放棄は許されないと考えていたためである。更に、飼い主はペットという存在を、③家族のように傍に居ることが当たり前であり、④癒しを与え、家族間のコミュニケーションも円滑にするものだとして捉えていた。この4要因によって、飼い主は問題行動を起こすペットにも向き合い続けることができると考えられる。

研究対象者は、日ごろからペットの世話に携わっていた家族には、ペットの問題行動に関する相談や協力を求めている。ペットの世話を主婦に任せていた家族も多かったが、その家族に対する不満の有無など、家族への思いや考えは研究対象者によって異なっていた。

出産後に子どもの障害が発覚した母親の慢性的悲哀説についての検討

【研究目的】

本研究は、出産後に子どもに障害が発覚した母親が、1) 子どもの障害をどのようにして知り、2) どのように子どもの障害と向き合い、3) どのように子どもの障害を受け入れたのか、を明らかにする研究である。

本研究では、出産前の検査（出生前診断）では発見できない障害や、出産時のトラブルにより発生した障害に焦点を当てる。具体的には、単一遺伝子疾患、多因子遺伝、環境・催奇形因子によるもの、視覚障害や聴覚障害、発達障害などがこれに該当する。

【研究対象者・研究方法】

研究対象者は、出産後に子どもに障害が発覚した母親で、子どもの障害に対する悲嘆を経験した自覚があるが、現在は、育児に対する気力が湧き、子どもと共に歩む未来が見据えられている方とした。子どもは、現在小学生以上であることを条件とし、本研究では、知的障害または自閉症を持つ子どもの母親の体験を扱った。

研究データの収集は、インタビュー調査によって行い、インタビューの内容は、研究対象者の同意を得た上で録音し、逐語録に起こした後、ナラティブ分析にて分析を行った。

【分析結果・考察】

母親は、子どもの障害が発覚し、障害を受け入れるまでの過程で、一つ一つの出来事や体験において、不安や葛藤を抱えていることが分かった。障害が疑われてから宣告されるまで、兄弟との比較や障害に関する本の購読により、障害であることを覚悟したうえで診断に向かった。宣告後は、育児や子どもの将来に関して大きな不安を抱えるが、医師や夫の言葉や支えにより、子ども育て切ろうとする母親たちの強い意思が感じられた。日常生活では、子どもがストレスを感じないようにするため、コミュニケーションの取り方に気を遣っていることが分かった。また、子どもの障害の特徴や症状をよく捉えた上で、それを配慮した関わり方をするように意識していた。特別支援の利用については、利用前に迷いを感じる様子が伺えたものの、最終的には、育児の幅が広がり、子どもの教育方針を定めることができたと述べている。時には、周囲からの視線や健常者との違いを感じることで、悲しみや怒り、虚しさなどの感情を抱き、精神状態に異変が生じた経験もあったという。しかし、子どもの成長を感じることなど、ポジティブな感情を抱くことも多く、当事者たちは、今後も自分の人生をかけて子どもの将来を見守ろうとしている。

国際結婚という体験

一日米国際結婚夫婦の日本人女性の体験に焦点を当てての検討

【研究目的】

本研究では、国際結婚に至った日本人女性の体験に焦点を当て、国際結婚が当事者にとってどのような体験として捉えられているのかを明らかにした。具体的には、1) 国際結婚に至るまでの経緯、2) 夫婦の理解を築く過程、3) 子どもの養育、に着目し検討した。国際結婚に至った日本人女性の体験に焦点を当てることで、生活地への適応によらない国際結婚夫婦のあり方を明らかにし、どのように結婚生活を可能にしてきたのかを考察した。

【研究対象者・研究手法】

アメリカ人男性と結婚に至った日本人女性の方を対象とした。日本で5年以上結婚生活を送り、現在も婚姻関係が続いていること、夫婦に子どもがいることを条件とした。3名の対象者の方に40～60分程度の半構造化インタビューを行った。同意を得てインタビューの内容を録音し、逐語録を作成してナラティブ分析を行った。

【分析結果・考察】

結婚以前の海外への興味関心は、日本人女性にとって国際結婚のハードルを下げることに繋がっていることが分かった。海外と積極的にかかわる経験は、異なる文化への親和性を高め、異なる文化的背景を持つ夫との生活への抵抗を和らげる要因の一つになっていた。

国際結婚夫婦の結婚生活では、夫婦の相違を意識化されやすいことが明らかになった。夫婦の相違を理解する過程では、お互いに妥協点を見つける方法、お互いの意見を細かい部分までしっかり伝えあう話し合う方法やお互いに干渉し合わない方法など、各夫婦で構築されたものが見られた。

結婚生活での子どもの養育は、より緊密な夫婦のコミュニケーションを求められることが分かった。国際結婚夫婦の子育てでは、子どもの母国語の決定や「ハーフ」とされる子どもに対するサポートなど、日本人夫婦では抱えることのない課題が存在することが明らかとなった。国際結婚夫婦にとって、子どもの養育は家族を作り上げる過程で重要な経験になっていた。

研究対象者3名は、国際結婚も日本人同士の結婚と変わらないと語ったが、名乗りの変化による日本社会での違和感、夫婦の習慣や価値観の相違、子どもの養育で抱える課題とそれに対する夫婦での話し合い、などといった国際結婚特有の苦労が存在していた。

脱青年期の若者が一人暮らしを通して心理的自立に向かう過程の検討

【研究目的】

本研究の目的は、脱青年期の若者が一人暮らし経験を通して、どのように心理的自立に向かっていくのかを明らかにすることであった。具体的には、1) 一人暮らし経験の位置づけ、2) 一人暮らしを通じた個々人の変化から見る心理的自立の様相、3) 親子関係がどのように意識されるようになったか、を考察した。

【研究対象者・研究手法】

本研究の対象は、一人暮らしを通して、心理的自立に至ったと感じている社会人であった。脱青年期に該当する22歳から30歳の方で、一人暮らしの経験年数は3年以上と設定した。男性2名、女性2名の計4名の研究協力者に対し、約1時間の半構造化インタビューを実施した。全てのインタビューは同意を得た上で録音し、音声データを逐語録に起こした後、ナラティブ分析を行なった。

【分析結果・考察】

一人暮らし経験は、親の庇護下から出て、自分から他者や社会と関わるきっかけとして位置づけられていた。具体的には、世帯主としての役割を果たす様子や、自ら働きかけて親以外の拠り所を作る様子が見られた。また、親と離れることを目的としているか否かによって、寂しさや開放感などの一人暮らしに対する感情が異なっていた。

心理的自立とは、自分なりの価値観を明らかにすることであると考える事ができた。価値観を明らかにするとは、自分自身の体験に基づいた独自の考え、人生において重視するもの、行動指針などを獲得することである。加えて、心理的自立を成し遂げても、誰にも頼らなくなるのではないことも示された。また、先行研究と同様に、男女で自立の様相には差が見られた。男性は親と離れる形の自立を、女性は親と共生的な関係を保ちながらの自立をした。しかし、男性が生活管理的な側面を含んだ自立を早い段階から成し遂げているなど、日本の伝統的なジェンダー観とは必ずしも一致しないという結果も得られた。

協力者4名に共通して、親から一步引いた客観性を持つようになるという変化があった。具体的には、「大人」の対象に親しかいない状態からの脱却や、親の態度の許容が可能になるという変化があった。先行研究では、女性は母親と共生的な関係を保ちながら自立するという見解があり、本研究でも同様の様子が見られた。しかし、共生的な関係を築きつつも、母親から独立しなければならないという思いを抱いていることも示された。

第二子誕生後における母親の育児への向き合い方の検討 —第二子誕生時に2,3歳であった第一子との関わりに焦点を当てて—

【研究目的】

本研究の目的は、第二子誕生後、母親がどのように第一子と関わり、二児の育児と向き合っていたのかを明らかにした。具体的には、1) 第一子のイヤイヤ期の様相と母親の対応、2) 母親は第一子についてどのような思いを抱き、どのように接していたのか、3) 第二子誕生後、二人の子どもの育児とどのように向き合っていたのか、について検討した。本研究では、イヤイヤ期を第一次反抗期の一部として扱った。検討を通して、第二子の誕生を経験した第一子と母親の関わりについて考察した。

【研究対象者・研究方法】

本研究では、1) 第一子がイヤイヤ期を含む第一次反抗期を迎えているとされる、2歳から3歳の時に第二子を出産した母親の方、2) 夫と子ども2人の4人家族として暮らしていた、3) 第二子が0～3歳の間は専業主婦であった方を対象とした。きょうだいの性別は条件には含めないが、検討の際に考慮した。第二子誕生から1年半の期間の体験を中心に3名に半構造化インタビューを行った。録音したインタビュー内容を逐語に起こし、ナラティブ分析を行った。

【分析結果・考察】

第一子の変化は、第一次反抗期に関する変化と第二子誕生に関する変化の二側面から見ることができた。第一次反抗期に関する具体的な変化として、主に何らかの出来事に対してイヤと拒否することが挙げられていた。このような第一次反抗期に関する変化は2名に見られていたが、2名とも第一子にマイナスな感情を抱いていなかった。第二子誕生後における第一子の変化は、対象者全員に見られ、兄・姉としての役割に基づいたものが共通して含まれていた。きょうだいが生まれる前に、きょうだいの誕生やきょうだい誕生後の生活について第一子と話すことで、第一子がきょうだい誕生後の新たな環境に適応しやすくなると考えられる。対象者の育児への向き合い方は、周囲から得られるサポートの質と量によって違いが見られた。3人は、育児を行う環境に違いがあった。一つ目は、第二子が産まれた際、第一子が保育園や幼稚園に通っていたか否かという点である。二つ目は、自分の周りに育児をサポートしてくれる人がどれ程いるのかという点である。第一子が保育園に通っておらず、サポートがママ友からしか得られていなかった母親は、自分の時間がもてず、育児にマイナスな感情を抱いていた。育児において、周りからのサポートがあるか否かで母親の育児への余裕、母親が自身に使う時間、及び母親の抱える負担は大きく異なることが示された。周りからのサポートを得られていた母親は、第二子誕生後、第一子と関わる時間を積極的につくるようにしていた。

夫の転職を支える妻の心理的葛藤の検討

—夫婦間相互理解に着目して—

【研究目的】

本研究では、転職者である夫を支えた妻の経験に焦点を当てた。具体的には、1) 妻が経験した心理的葛藤を明らかにするとともに、2) どのように転職を志す夫に妻が関わったのかを検討した。また1)、2)を通して、3) 夫の転職体験を通して見えてきた家族の姿を考察した。転職者を一家の担い手である既婚男性に限定し、その体験を配偶者である妻の視点から明らかにした。

【研究対象者・研究手法】

本研究の対象は、働き盛りであった中年期にあたる、当時35歳以上45歳以下の夫をもつ妻で、1年以上前に転職した夫をもつ妻とした。また夫婦の間に子どもがいた時に転職したこと、自分の意志で転職したことを条件とした。さらに本研究では、転職に対する考えを夫婦間で擦りあわせていく過程を分析するため、転職前に夫から相談を受けたという条件も設けた。対象者4名に半構造化インタビューを実施した。インタビューは録音したものを逐語に起こし、ナラティブ分析を行った。

【分析・考察】

妻は転職に不安を抱えつつも、夫の体調不良を鑑みて、転職に反対しないケースが多かった。転職前の夫婦での話し合いで、意見交換が不十分だった場合、夫が転職してしばらく経過しても妻の心には不満が残っていた。夫の転職先探しが難航したり、転職後に前職の収入を下回ったりした時に、妻は不安を感じていた。

妻の夫に対する関わり方は、多様であった。不安を夫にあえて伝えない方もいれば、とことん納得できるまで話し合う方もいた。妻は夫の気質に合わせて、夫との関わり方を考えているとわかった。育児に関しては、二つのケースが見られた。一つ目は、夫の育児に対する協力姿勢に不満をもち、夫婦げんかに発展するケースであった。二つ目は、夫が転職先の仕事に集中できるように、仕事に慣れるまでは、あえて妻のみが育児を担っているケースであった。

妻たちは夫の転職を通して、家族の在り方を見つめ直していた。一人目の方は、夫の転職を支える中で、家族は「運命共同体」であるという覚悟を育てていた。二人目の方は、家族全員が一緒の場所で暮らすことに意味を見出していた。三人目の方は、夫が妻の意見より、自分の意見を押し通すような強引なコミュニケーションが浮き彫りになっていた。四人目の方は、夫婦で互いの背中を預け合うような関係性が見られた。

以上から、妻は夫の転職に対して心理的葛藤を抱えつつも、夫の気質に合わせて夫の転職体験を支えている様子が窺えた。

小学生の習い事に込められた母親の願い
—週5日以上習い事をするケースに焦点を当てて—

【研究目的】

本研究では、小学生時代に週5日以上習い事をしてきた子どもを持つ母親に焦点を当て、母親が子どもの習い事にどのような願いを込めていたのかを明らかにすることを目的とした。具体的には、1)母親は子どもにどのような思いで習い事をさせていたのか、2)子どもの習い事を通して母親はどのようなものを得られたか、3)母親と子どもの間でどのような思いが交錯していたか、に関して検討した。

【研究手法】

本研究では、小学生の頃に週5日以上習い事をしてきたという子どもを持つ母親を対象とした。週5日以上習い事をしてきた期間は1年以上とした。学習塾は本研究で扱う習い事からは除外した。子どもの現在の年齢は20代とした。条件に当てはまる3名の方にインタビューを行い、同意を得た上で録音をした。インタビュー内容を逐語に起こし、ナラティブ分析を行った。

【分析・考察】

子どもに習い事をさせる上で、2つの願いがあることがわかった。1つ目は、日常や学校の授業で使うであろう力をつけさせたいという願いである。2つ目は、子どもの素養を育みたいという願いである。週5日以上習い事は親にとって経済的、心理的負担がかかるが、他より秀でた力や特別な能力を身につけさせたいと考えているわけではないことが明らかになった。

子どもの習い事は親にも良い影響を及ぼしていた。母親は習い事を通して、子どもの新しい一面や兄弟の性格の違いなどを発見していた。また、子どもが努力する姿や成長していく姿に励まされ、学びを得ていた。母親自身は経験したことがないことを、子どもが経験することで、母親は新しい世界を知ることができていた。子どものための習い事であったが、結果的に母親のためにもなっていた。

習い事を巡っては母親と子どもの思いが交錯していた。特に習い事を辞めるときの親子のやりとりには各家庭で特徴があった。多くの子どもは、遊ぶ時間や自由な時間がほしいという思いを持っていた。習い事をしてきた当時は母親に言い出せず、習い事を辞めて成長した後になってから母親に伝えていた。母親は、子どもに習い事をある程度は続けてほしいという気持ちを持っていたことが窺えた。子どもは母親の願いを感じ取り、遊ぶ時間がほしいということ言わずに習い事を続けていたと考えられる。母親は子どものことを考えて習い事をさせており、子どもに習い事を無理強いする様子はなかった。しかし、遊びたいという思いを汲み取ることは難しかったことがわかった。

自覚的な信仰意識を持って生活をすることについての検討

—日本人クリスチャンを対象として—

【研究目的】

本研究では、当事者の主観的体験から信仰の実態を捉え、信仰意識がその人の意識にどう作用するのかを検討した。具体的には、1) 洗礼を決意するまでにどのような経緯があったのか、2) 日々どのように信仰を深めているのか、3) 信仰を持って生活することは当事者にとってどのような体験かを明らかにした。

【研究対象者・研究手法】

自らの意思で洗礼を受け、定期的に教会に通う方を対象とした。家族の中で唯一クリスチャン、または親や兄弟の影響を受けずに家族の中で初めてクリスチャンになったこと、受洗後3年以上経過していることを条件とし、年齢や性別は問わないものとした。対象者5名に半構造化インタビューを実施し、インタビュー内容を録音して逐語に起こしたうえ、ナラティブ分析を行った。

【分析結果・考察】

対象者のうち4名が歌をきっかけに教会を訪れていた。ゴスペル、聖歌に興味を持ち、信仰の場ではなく歌う場として教会を訪れ、当初は全く信仰心を持っていなかった。その他1名は、留学時に関わった人達にクリスチャンが多かったことで感化され、現地で受洗した。

信仰に至る経緯は、対象者のうち大きく2パターンに分けられた。1つは、キリスト教や信仰についてそれほど疑いを持ったり理解に苦しむことなく、純真に受け入れてその後も信仰を貫いているパターンであった。もう1つは、洗礼を受けること自体に抵抗感を持ったり、クリスチャンや教会に対してあまり好意的に捉えていなかった時期があったりと、疑いや葛藤などを経て信仰するようになったパターンであった。また、受洗当初は本当の信仰ではなかったという語りが得られたことや、受洗後に信仰の捉え方や祈りなどのクリスチャンとしての行いが徐々に変化していく様子が窺えたことから、必ずしも受洗がその人にとって心からの信仰を表明する出来事とは限らないことが特徴として浮かび上がった。

信仰を深める行いとして祈りが最も重要であることが分かった。神を良き理解者・相談者と捉えて悩みや不安を吐露すること、家族や親しい人を案ずること、神への感謝を捧げることなどが祈りであり、形式的に行ったり利己的な祈りではないことが明らかであった。

それぞれの語りから、困難の捉え方や乗り越え方に特徴が見られた。困難を試練と捉え、結果が悪くてもそれは神の計画であり、最終的には祝福と共にあることを信じている。そうした姿勢から、信仰によって視点を変えて現実と向き合う強さを身に付けていると感じられた。